

Herbert Ernst Brekle :
Generative Satzsemantik und transformationelle Syntax im System der englischen Nominalkomposition

三 城 満 禧

Tübingen 大学の新進気鋭のアングリスト Brekle のこの本年刊行された著書は、最近の西ドイツの生成文法研究の高い水準を表わしているばかりでなく、この理論の新たな開拓分野、応用領域をも示すすぐれた研究書である。ドイツ語圏では、生成文法については Chomsky の “Aspects” が発表される以前の段階までは、東ドイツの積極的な摂取と、ドイツ語への応用が目につき、西ドイツはある意味で一歩リードされた感じであったが、——東側のこの面でのいわば重要な機関誌が、ベルリン・アカデミーの言語学研究グループの *Studia Grammatica* であった——最近では、Stuttgart の Baumgärtner 教授を中心に、西の方も、単なる紹介、摂取の段階を通り越した、着実な成果をあげはじめている。このことは、本書のような秀抜な研究書が生み出されたということからだけでなく、啓蒙の分野においても、すぐれた入門書——たとえば、近刊の Bechert / Clément / Thümmel / Wagner の “Einführung in die generative Transformationsgrammatik” ——があらわれはじめたことからもうかがわれる。

六章からなる本書の意図を先取りして要約すれば、これは生成的意味論 (generative Semantik) の立場から、英語における複合各詞の意味論的構造を記述せんとしたものであるといえる。第一章から第三章までは、方

法論上の問題を中心に、Brekle 自身の理論上の立場でもある、“Aspects” 以後の新しいモデルを、ひじょうに鮮かな手際で展開している。第四章では、第三章で示された一般的な生成文法モデルに立脚して、英語複合名詞の構造記述のため、とくに基底部 (Basis) の範疇部門に焦点をあてている。第五章では、このようにして生成された意味範疇の組み合わせよりなる構造を、実際の英語複合名詞に適用し、第六章は全体の総括となっている。

予備論的性格をもった第一章では、構造記述のために、あるいは構造表示のために、述語論理学の方法を採用する妥当性について論じられているのであるが、その正当性の根源は、けっきょく、人間の言語活動が、音声という物理的な領域と対極をなす意味の次元では、概念的思考ときわめて近い関係にあるという事実に求められるのであろう。言語の世界と論理の世界がどれほど本質的に近く、また、どのような形で結びついているかは、この本の研究対象の枠をはみ出す問題ではあるが、生成文法理論のいわばもっとも重要な副産物の一つである feature, なかんずく semantic feature (意味論的素性) が、この二つの世界の接面をなしているということは指摘できるであろう。

第二章では、英語の複合名詞という対象の限定ということのほか、生成文法以前の言語学、とくに Jespersen のこの問題に対する modifier-head によるアプローチ、および生成文法理論の枠内では、“Aspects” で提示されたモデルに全面的に依拠しながらも、複合名詞を本質的には関係文のように constituent sentence と同等と見る Lees の立場が紹介・援用される。Brekle の方法は、修飾・被修飾というきわめて漠然とした、構造記述という点からはあまり意味のない規定の仕方、さらには、関係文の短縮というもっぱら変形操作という立場のみから対象を処理し

ようとする行き方を、精密化しようとしたものである。その際、Brekle のこのいわば応用論に対して、原理論ないしは一つの原理論をもとにした新しいモデルを提供したのは、“Aspects” 以後、主として Fillmore によって提案された生成的意味論である。Brekle はこれにとくに generative Satzsemantik という名前を冠しているが、それは、この対立概念としての Wortsemantik ないしは lexikalische Semantik が念頭にあったからであろう。表面的に見ると線型性を唯一の構造とするかに見える文をして、そもそも文たらしめる潜在的構造をあらわにするのが、この generative Satzsemantik の役割であるが、他方では、これは同時に、Lexikon とともに基底部を構成し、深層構造を生み出す重要な部門、いわゆる categorial component (範疇部門) でもある。“Aspecto” のモデルとの根本的な相違もここにある。すなわち、categorial component はもはや単に syntactic (統語論的) な部門、その言語において可能な名詞・動詞などの基本的・統語論的範疇の組み合わせによる抽象的骨組みを生成する部分ではなく、むしろその言語において可能な基本的文型の基盤となる意味論的範疇の組み合わせの場である。“Aspects” では解釈的な機能しかもっていない意味論が、categorial component にくりこまれることによって、生成的な機能を獲得するようになり、その結果、意味論がもっとも中核的な基層をなし、逆に統語論は、一段押し上げられて、深層構造の表層構造への転換をもっぱら対象とする、本質的には変形的 (transformational) な部門であることが明らかにされる。このような基層としての意味論の展開に必要な、その言語において可能なもっとも基本的な意味論的範疇を、Brekle は Relationskonstante (関係定数) とよんでいるが、これは Fillmore のモデルにおける格 (case)

の概念とひじょうに近い。本質的に同じものだといっていいかもしれない。ただ、Brekle は Reichenbach, Russell, Carnap らの述語論理学の表現方法によって、範疇相互間の関係までをも表わそうとしているため、述語そのものを Relationskonstante としてとらえ直し、その結果、その中に格自体が吸収され、潜在化してしまう点が異なる。このような Relationskonstante は、見方を変えれば、前述した意味論的素性の中のもっとも基本的なものであるともいえる。

この新しいモデルの機構をもう一度総括すると、Satzsemantik の部門で、Relationskonstante や格などの基本的意味論的範疇を組み合わせる Formationsregel (生成規則) が、その言語において可能な文の意味構造を生成する。この構造は、ひじょうに抽象的な骨組みにすぎないのであるから、これにさらに、辞彙をはめこむという操作が必要になる。これを可能ならしめるために、さらに中間的な手続きとして、いくつかの素性を伴った統語論的範疇をまず接合する必要がある。辞彙をはめこまれた構造は、Syntax部門に送られて、必要な各種の変形操作を加えられて、表層構造を生み出すという順序になる。使用される規則・記号という観点からこの機構をもう一度見てみると、全体の流れは、i) 論理体系における機能を規定された変数・定数等の記号、ii) これらの記号の組み合わせである構造を生み出す生成規則、iii) 生成された構造を今度は対象として、それを変形する変形規則 (Transformationsregel) の三つより成る。Satzsemantik の部門において生成された構造、すなわち深層構造を、Brekle はまた Satzbe-griff と名づけて Wortbe-griff に対置しているが、この Satzbe-griff は、これに、疑問・否定・時制・限定作用素などの広い意味での modal な要素を加え、さらに変形部門をくぐり抜けて現実の文法的に正しい

文となるという意味で、いわば文の原型・祖型なのであるが、同時に、modal な要素を付加される以前の段階で分岐して複合名詞が作られていくことを考えれば、これは、複合名詞の原型でもあることになる。同じ Satz-begriff が一方では文に、他方では複合名詞になるのであるが、この現象は、述語化と名詞化という言語内における二つの大きな環流に対応している。したがって、名詞化に対してはたとえばストック (stock), 述語化に対してはフロー (flow) という比喻を用いることもあながち不適切ではないであろう。

Brekle は, Satz-begriffe の表現にあたっては, 述語論理学に見られる表現, Russell のそれを多少変形して採用しているが、——他の表現との関係, 変形の理由を述べた部分は, 多少駆足で, 十分に意を尽しているとはいえない——述語に代わる Relationskonstante としては, 第四章において, 次のようなものがあげられている。

- 1) INCL: 含有 (集合論・論理学における包含関係に相当)
- 2) PART: 部分含有 (集合論・論理学における共通集合・and に相当)
- 3) AFF: 作用 (Fillmore の dative, objective に相当)
- 4) CAUS: 惹起 (Fillmore の agentive にほぼ相当)
- 5) LOC: 場所的關係 (intralokal な副詞句・前置詞つき目的語に相当)
- 6) DIR: 方向的關係 (interlokal な副詞句・前置詞句に相当)
- 7) TEMP: 時間的關係
- 8) INSTR: 道具的關係
- 9) CONFTO: 一致
- 10) FIN: 目的

- 11) BECAUSE: 理由
- 12) INALPOSS: 譲渡不可能な (身体的) 所有
- 13) RES: 相似

すでに述べたように, Brekle の Relationskonstante は, Fillmore の格と本質的に同じものであるが, Brekle はその変則的な記号表現のおかげで, Relationskonstante 相互間の Hierarchie を明示的に表現することができるようになり, それが一つの大きな長所になっている。彼のモデルのすぐれた点の第二は, 一つの基本的な satzsemantisch な構造から, Topikalisierungsregel (主題化規則) によって, determinatum ないしは determinans を異にするいくつもの複合名詞が作り出されるという点である。

第5章では, 具体的な英語の複合名詞が, 次のいくつかの例のように, このモデルによって記述されているが, 全体としてみれば, これは内的構造による複合名詞の分類にもなっている。

$$1. \begin{cases} \lambda y \text{ [INCL } (y, w)] \\ \text{条件: } Q^1y, Q^2w \end{cases}$$

という構造で表わされる複合名詞としては, たとえば *pathway*, *palmtree* などがあげられるが, ここでいう条件とは, 上述の主題化規則のことで, Q^1y は成分 y (すなわち *way*, *tree*) がまず主題化されて determinatum になることを表わし, 次に Q^2w によって成分 w (すなわち *path*, *palm*) が determinans になる。*palm* も *path* も意味上 *tree*, *way* にそれぞれ含まれている——すなわち INCL という関係が成り立っている——のであるから, この場合, 逆に条件 Q^1w , Q^2y による, *waypath*, *treepalm* は不可能となる。なお記号 λ は, 主題化された変数の前につけられる。

$$2. a. \begin{cases} \lambda w \text{ [AFF (F, w)]} \\ \text{条件: } Q^1 w, Q^2 F \end{cases}$$

小文字で表わされた変数がいわゆる名詞類を指すのに対して、大文字のそれは、文における述語動詞によって表わされるような状態・性質・過程・行為を意味するが、この構造にあてはまる名詞としては、*madman*, *driftwood* などあげられる。この場合、 $F = \{\textit{mad, drift}\}$, $w = \{\textit{man, wood}\}$ である。

$$2. b. \begin{cases} \lambda F \text{ [AFF (F, w)]} \\ \text{条件: } Q^1 F, Q^2 w \end{cases}$$

これは、上記の 2. a. の構造の変種で、*determinatum* と *determinans* を交換したものにすぎない。例としては、*bandwidth*, *wavelength* などごく少数しかないようである。

$$3. a. \begin{cases} \lambda w \text{ \{AFF [LOC (R, y), w]\}} \\ \text{条件: } Q^1 w, Q^2 R, Q^3 y \end{cases}$$

AFF, LOC という二つの Relationskonstante が組み合わされたケースであり、例としては、*fieldmouse*, *countryman* などがある。注目すべき点は、 $w = \{\textit{mouse, man}\}$, $y = \{\textit{field, country}\}$ とちがって、 $R = \{\textit{living}\}$ は explicit には現われないことである。Brekle がこの点に全く言及していないのは、物足りない。もう一つ興味深い事実は、この構造で表わされる LOC という成分が、LOC と

AFF の位置を交換したたとえば LOC [AFF (F, w), z] などの構造における LOC と本質的にちがうということである。すなわち後者は、文の次元に引きもどして考えると任意成分であり、前者は、それに対して不可欠な成分である。

$$3. b. \begin{cases} \lambda y \text{ \{AFF [LOC (R, y), w]\}} \\ \text{条件: } Q^1 y, Q^2 R, Q^3 w \end{cases}$$

これも 3. a. の変種である。mousehole, beehive などが、例としてあげられる。

Brekle のこの労作は、各所にひじょうに犀利な分析が見られ、とくに、4. 2. 1. 3. で展開されている主題化規則は本書の圧巻であるが、今後に残された課題としては、文を対象とする generative なモデルとの統一ということがあげられるであろう。その際、Fillmore 流の格による表現と、ここで用いられているような述語論理学的表示の優劣が、とくに生成規則の立て方という観点から問題になって来ると思われる。

Herbert Ernst Brekle: *Generative Satzsemantik und transformationelle Syntax im System der englischen Nominalkomposition*, (=Internationale Bibliothek für allgemeine Linguistik, Bd. 4), Wilhelm Fink Verlag München, 1970.